

## アメリカの教育の行方



そこで、契機として、

「グローバルゼーション」に導かれる大学入試の未来構想  
一 機能的価値と情緒的価値の再定義を踏まえて

## グローバルゼーション ⇒ ダイバーシティ

- 人口減少社会の進む道は、  
⇒ 人材の多様化(多様な人材の集団に変わる！)
  - コラボレーション(共創)が求められる
  - 産業界では、現在の業種や業界の括りを越えて、今後ますます進行する = 存続のための新たな業種・業界の誕生

\* たとえば、ハイブリッドイグアナ。海イグアナと陸イグアナが種の保存のために交配し、新たなイグアナが誕生。

## 「知識基盤社会の高等教育」を考えるにあたって、

- 大学教育のグローバルゼーション ⇒ ダイバーシティ  
↓ イメージ! (人材・学生の多様化)
- 大学入試のマーケットの国際的拡大&成熟が不可欠
- それには、グローバルマーケットとしての学生移動基盤 (Student Mobility Platform) というモデルが必要!

## 「知識基盤社会」の特長として

- (1) 知識には国境がなく、グローバル化が一層進む。
- (2) 知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる。
- (3) 知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる。
- (4) 性別や年齢を問わず参画することが促進される。など。

## IIE FACT から、留学生主要受け入れ国。 留学生総数 2,302,214

- 留学生数(2009) :

1. アメリカ	671,616	5. 中国	238,184
2. イギリス	415,585	6. オーストラリア	223,508
3. フランス	266,448	7. カナダ	123,901
4. ドイツ	239,143	8. 日本	123,829

他、

\* 中国の国内大学生総数は、3,100万人(2010)、2005年時の35%増

## OECD諸国の留学生受け入れの動向 アジア地域の学生が全世界の留学生の43%を占める(UNESCO)

- 世界の主要な留学生送り出し国 (2008): 日本における留学生受け入(2008):

● 1.中国 510,842 (20%がアメリカへ)	1. 中国 72,766
● 2.インド 184,801 (56%がアメリカへ)	2. 韓国 18,862
● 3.韓国 115,464 (65%がアメリカへ)	3. 台湾 5,082
● 4.ドイツ 94,408	4. ベトナム 2,873
● 5.トルコ 65,459	5. マレーシア 2,271
● 6.フランス 63,081	6. タイ 2,203
● 7.ロシア 58,983	7. アメリカ合衆国 2,024
● 8.日本 52,849	8. インドネシア 1,791

## 二つの価値に注目！

- **機能的価値** = 大学入試が学生・生徒に提供できる価値
- **情緒的価値** = 学生・生徒が大学入試を受けることで得られる心理的価値

そして、“**信頼**”は如何に生まれるか？

本日のテーマとして:

- 国際的視点に立って人材を育成することと大学入試について
  1. 教育を取り巻く今日的状況
  2. カレッジレディネス(College Readiness)に着目し、形成を促す
  3. しかし、大学入試 ≠ カレッジアドミッション (College Admission)
  4. 大学入試の未来展望
  5. その他の論点

## 1. 教育を取り巻く今日的状況

- 今や、学校教育の目標は、単なる学習支援や社会的人間の形成にのみあるのではない。むしろ、若者たちが如何に学校教育を活用して、豊かな職業生活への価値ある移行をできるように手助けできるか、がその目標に内包されなければならない。
- わが国では、平成23年度から完全実施される新しい学習指導要領で、これまで以上にキャリア教育の推進が求められている。

## 21世紀のために、(アメリカの場合)

- 2011年2月、ハーバード大学教育大学院は、繁栄への道 (Pathways to Prosperity)と題したプロジェクト報告書を発表した。副題には、「21世紀のために、アメリカの若者たちの教育目標を達成する」と書かれている。
- 中等教育では、多くの若者たちが大学進学か、就職するのか、極めて限定された選択肢の中で育てられている。様々な職業で必要とされる知識や技能の間の関係は、今日、それほど大きな隔たりがあるわけではない。専門職では、むしろ、相互横断的に似通った能力が期待されることも多い。それ故、彼らの学びは、結果的に似通っており、むしろその関係の繋がりこそが重要である。

23

## 2. カレッジレディネス(COLLEGE READINESS)に着目し、形成を促す

- わが国の大学入学者選抜では、現在、年齢人口の半数以上が大学・短大に進学する。その中で、学力試験を経て大学に入学する者は50%台に留まり、推薦・AO入試などの非学力型選抜の割合は40%を超える。少子化のなかで受験競争の緩和に伴い、競争の弊害を問う声はむしろ後退し、いまや学生の学力低下、進学準備不足を憂う声大きい。
- 多くの若者が大学教育の機会を享受できることは理想である。だが、元来、高校も大学も共にこれほど多くの学生を送り出し、また受け入れる機関として想定されたものではなかった。

24

特に、グリット＝不屈の精神、気概の大切さを説く研究者たちは、

- この用語(Grit)に、自己訓練、粘り強さ、熱意の意味を込める。
- 学業の未達成者たちは、不適切な教師、つまらない教科書、大人数のクラスを避難する。しかし、研究者たちは、彼らの知的可能性を失墜させる別の理由を提示する。それは、自己訓練の失敗である。
- アメリカの若者たちの多くは、長期的な利益のために短期的な快楽を犠牲にできるか、という選択で困難を抱えている。自己訓練プログラムは、学業達成を成し遂げる上で、重要である。

## 国際社会人材基礎力(多国籍企業を中心に)

多国籍企業が採用に際して期待する力:

いっぱい詰まった頭より、良く動く頭を持つ: Static(静)でなく、Dynamic(動)な頭を持つ。

- 🍏 Read (自分の考えと結びつけながら読む(鵜呑みにしない)ことができる。)
- 🍏 Question(自分の考えとの違いに対して質問や疑問を適切に設定することができる。)
- 🍏 Analyze(自分の考えと他の考え・視点と比較して分析することができる。)
- 🍏 Communicate(比較や分析を通じて行った自分の判断を伝えることができる。)

⇒ この過程がダイナミックな関係を作る。

3.しかし、  
大学入試 ≠ カレッジアドミッション (COLLEGE ADMISSION)

- 大学入試は、Selection (入学者の選抜)の装置である
- カレッジアドミッション (College Admission)は、入学有資格者の認定の装置である
- 高校卒業は、大学受験資格であるが、現状では、大学入学有資格認定ではない。→ 入学考査が別途課せられている。

ダイバーシティに対応できる新たなプラットフォームの選択

- Selection (入学者選抜)  
から
- College Eligibility (入学有資格者認定)と  
College Transfer (機関移動認定)



ELIGIBILITY (入学有資格者認定)テストが国際化を拓く！

これからは、Eligibility Test の開発にシフトすべき！

- “Eligibility” とは、“何か”？  
例えば、UC Eligibility を見てみると、

<http://www.universityofcalifornia.edu/admissions/freshman/california-residents/admissions-index/index.html>

また、“TRANSFER (機関移動認定)”制度の導入と展開

- College transfer is the movement of students **from one higher education institution to another** and the process by which **academic credits** are accepted or not accepted by a receiving institution.
- カレッジトランスファーとは、大学生がある高等教育機関から他の高等教育機関に移動することであり、同時に、**それまでの既得履修単位**が移動先の高等教育機関において認定される／認定されない過程である。

⇒ *Think Globally and Act Globally !*

#### 4. 大学入試の未来展望: 大学入試の価値(不易と流行)は？

- 大学入試で、変化しないものは何か？
- 大学入試で、変化するもの、日々改善の努力をし続けなければならないものは何か？
- 変化(それは、Innovation? or Change?)の理由は何か？個別の大学／社会の変化、それとも他に？
- 大学入試の機能的価値、情緒的価値そして、信頼性は……？
- 大学入試のステークホルダーは誰？何が彼らの満足度と関係しているか？

#### 論点) 大学入試の社会的責務(アカウンタビリティ)

- 文化的背景が違う様々な卓越性と如何に向き合うか？
- 社会的責務(Social Duty)と如何に向き合うか？
- 「教育の目的は、共通の成果の追求ではなく、個々の能力の育成であるという認識」と如何に向き合うか？
- 高等教育は、No Child Left Behind! の対象か？！  
⇒ Higher Education for All!

論点)我が国の「学力」という思想

- 「5教科7科目の試験で学力は測れる」、という思想

>>>これは、我が国固有の学力思想であるが、諸外国には、それぞれに異なる学力思想(イギリスのAレベル、ドイツのアビツアー、アメリカのSATやACT、韓国のCSATなど)

モデルとして、

DIGITAL IMMIGRANT VS DIGITAL NATIVE

(デジタル移民)

(デジタル先住民)

(調べる)→知る→咀嚼する→展開する

Advanced 期待値以上

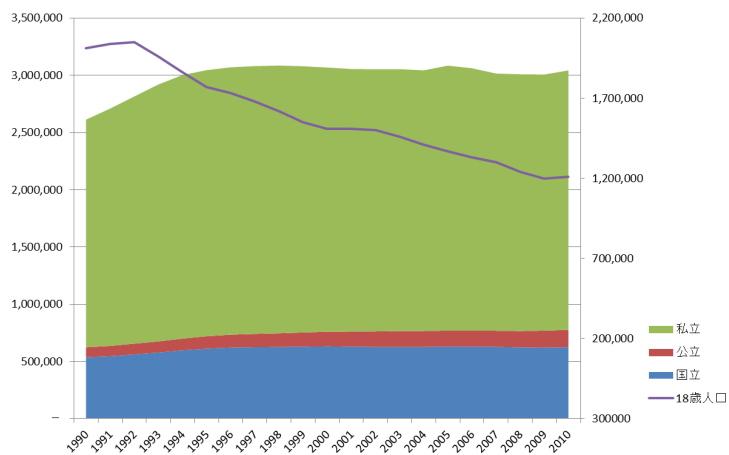
Proficient 期待値レベル

Basic 最低値保証

しかし、

- 大学収容力としての305万人という規模は変わらない。

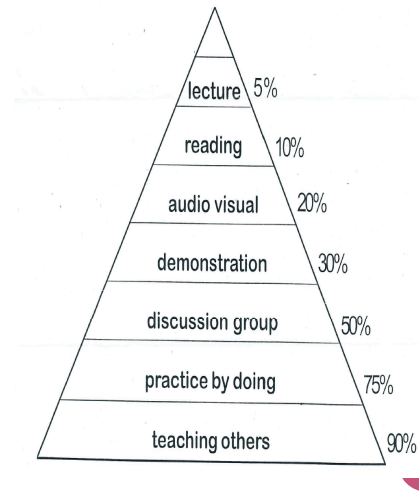
### 大学(短大・学部・大学院) 学生数の推移



出典: 荒井克弘作成図(2011)

## THE PRINCIPLES OF LEARNING (学習の原理)

- 講義を聞く 5%
- 読むこと 10%
- 視聴覚を利用する 20%
- デモンストレーション(実演)をする 30%
- グループ・ディスカッションで学ぶ 50%
- 体験的に学ぶ 75%
- 他人に教える 90% ⇒コミットメント!



12.10.31 ©Yoshi & Associates

## たとえば、IB

- 国際バカロレア資格 (International Baccalaureate) は、スイスの財団法人国際バカロレア機構 (Organisation du Baccalaureat International) の定める教育課程を修了する(= 大学入学資格認定)と得られる資格である。
- 2010年時点で、全世界139カ国の3086校の学校で採用されている。
- 世界の著名な大学を含め、122か国以上、1764の学校で認められている。

12.10.31 ©Yoshi & Associates

38

## さて、誰の為のセンター試験か？

- センター試験を選択してくれた人たちのデータはあるが、センター試験を選択しなかった人たちのデータはない。
- “Open Access”の時代の入試研究には、新たな高等教育時代を拓くために、実は、センター試験を選択しない集団についての研究が不可欠である。その中には、多様な、グローバルな集団(留学生を含めて)の研究が不可欠！

## 教育の貯金(EDUCATION SURPLUS)

### ー ハーバード物語

- 良質な教育の成果として貯金を大学で使い果たす？
- センター試験は、そうした貯金？もしあれば、測っているのか？

>>> 中等教育と大学教育は、昔も今も、接続などしていない  
(荒井理論)

- ⇒ 受験学力は、大学入試でリセットされる消費型学力？！
- ⇒ 受験を越えてもなお、役立つ“貯金学力”とは何か？

## EDUCATION “SURPLUS (教育貯金)”の考え方

- 「私立高校(プレップスクール)出身者は、教育の貯金 (Education Surplus)を持ってハーバードにやってくる。だが、ここでは貯金は増やさずに引き出してしまおう。」  
by クリムゾン(1873年創刊のハーバードの大学新聞編集長チャールトン・マックベイ)
- 彼らは学生時代の大部分を怠惰な遊びに浪費してしまおう。
- 公立高校出身の学生が他の学生よりも二倍も多くファイ・ベータ・カップ (1776年創設の大学優秀卒業生)に選ばれた。

- 教育の成果は、Surplusによって決まる。 獲得したものが、評価対象の100%であるのか、120%を獲得して、100%を費やすのか、20%は必ずしも効率的な成果(受験に有用なもの)ではないかもしれないが、その後の進路、社会進出、豊かな人生にとっては意味のある“余剰(貯蓄)”である。
- 我が国の「中等教育」は、こうしたSurplus (いわゆる教育貯金)を、どのように、どのくらい、どのように子どもたちに提供しているのだろうか？
- 中等教育(=大学受験力)+Surplus ⇒ 実は、この“Surplus”こそが、受験後力と深く関わっているのではないか?! ⇒ アセット型(身体化された文化資産)学力
- Surplus = 大学受験後力?! ⇒ APやIBに注目が移って行く。

たとえば、……など

- グローバル化時代とは、多様な価値が花開く時代であり、
- 高等教育への進学率の高まりは、排除(=Selection)の為の選抜型試験から共創(=Collaboration)の為の入学資格認定型アセスメントテストへシフトする
- その場合、The Examination から An Examination へ現実的に展開
- 理科・数学は、選抜型で、しかし、国語・英語は資格認定型ではどうか？ 韓国の場合は？

その他の論点として:

「新しい入試」の開発を考えるに当たって、21世紀スキルの獲得との関連性を踏まえて、

- 1. **High Stakes Test** のマイナスの連鎖から抜け出す。
- 2. **グローバル化とアカデミックモビリティを支える。**

\* low-stakes (anytime, anywhere) or high -stakes (secure testing center)